

ゲバラ

神崎たけし

洋介は作業を終えると、間伐した檜の丸太に腰かけて煙草を銜えた。陽はもうすぐ暮れようとしている。西方の稜線からは穏やかな斜光が香春岳の険しい岩肌を暮色に染めている。

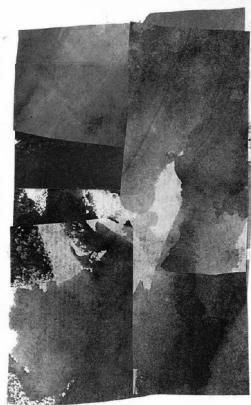
洋介は以前、三十五歳で禁煙したことがある。洋介の健康を心配していた妻の優子から、煙草を銜えるたびに苦言されていたからだ。しかし、四十七歳のとき、優子を癌で亡くしてからは再び煙草を喫い始めた。優子を亡くして投げやりな気持ちになっていたのだ。

洋介は遠く、青々と連なる山並を眺めている。以前は、こうして間伐した丸太に腰かけて休憩すると、優子も丸太に並んで腰かけ、ポットのコーヒーをコップに注いでくれていたが、その優子はもう、この世にはいない。洋介は夕

空を仰いだ。雲の隙間からは幾筋もの神々しい光が地上を照らしている。優子は、あの空の上から俺を見てくれているのだろうか。

祈るような想いで茜色に染まりゆく夕空を見つめ続けた。夫婦には子供はなく、両親もすでに他界していたので、洋介は優子を亡くしてからは、限界集落の薄霧村で一人暮らしである。それを心配した近所に住む叔母が、何度か再婚話を持つてはきたが、洋介にはその気はなかった。食器棚には優子の茶碗やコーヒーカップをそのままにしていたし、優子の衣類や靴も靴も処分しなかったのは、優子のことを忘れられなかったし、忘れたくもなかったからだ。

洋介は煙草を地下足袋の爪先で踏み消すと、帰り支度を始めた。軽トラの荷台にチェンソーやリュクサックを積み



込むと林道を下って家路についた。峠を下ると、畑の隅に老婆がひとり、ぼつねんと立っているのは叔母であった。二年前、連れ合いに先立たれた、八十二歳になる叔母は、僅かばかりの年金の足しにと、一反ばかりの畑で季節野菜を栽培し、道の駅で販売しながらどうにか余生を送っている。腰が曲がり、姉さんかぶりのタオルから覗く白髪は、何か物悲しく感じられた。

洋介は害獣フェンスのそばを廻ると叔母の畑の手前で軽トラをおりた。洋介が目にしたのは、食い荒らされた人參畑の無残な痕であった。夏に種をまき、叔母が丹精込めて栽培し、収穫時期を迎えた人參を野猿の群れから襲われたのである。

叔母は腰を曲げ、杖を突いたまま、放心したように、食い荒らされた人參畑を見つめている。野猿の群れは畝の人參を引き抜くと、ひとかじりしては捨て、また次の人參を引き抜く。

目移りするであろうが、生産者としては、きれいに食べてくれれば怒りもいくらか和らぐものを、野猿は人參のすべてを引き抜き、かじって傷物にしてしまう。

「役場の駆除に連絡せんかったんかい？」
洋介は、歩み寄ると背後から声をかけた。

「うちが町立病院から帰ってみたら、このざまたい——」

叔母の声は憔悴しきっていた。

「修平さんはおらんかったの？」

近所に住む修平は老猟師で、害獣駆除の隊員である。

「近頃は修平さんも膝が悪うて、うちと一緒にふれあいバスで病院通いしてるがの——。とにかく、ボス猿のゲバラを撃ち殺して貰わんことには、こっちが干上がってしまう——」

叔母はそう言うて嘆いた。薄霧村には、A、B、Cと野猿の群れが三グループいたが、最大頭数であるAグループのボスにゲバラが治まると、B群・C群を抗争の末に薄霧村から追いだしたのである。A群には頭数百二十頭の野猿がいるらしい。

洋介が子供のころ、野猿は全体でも百頭足らずであった。山には山犬がいて、野猿などを捕食していたらしい。その頭数は減ることも増えることもなかったが、数十年前に子供、老人が山犬に襲われた事件が発端となり、猟友会が山犬を絶滅させると、野猿や鹿、猪などが急速に増え始め、農作物の被害が深刻な状況になった。町議会では、カナダから狼を輸入して山に放つてはどうかという対策案まで検討していた。人間のエゴイズムが自然界に手を加え、自ら招いた結果なのだろうと、洋介は思っている。

翌朝、洋介は修平の家に立ち寄った。建付けの悪い玄関

戸を滑らせて声をかけると、畳の上を右足を引きずるよう
に修平が顔を出した。

「膝が悪いようだね」

洋介は上がり檻かまぼこに腰かけると修平を心配して言った。

「そうよ。もう八十年も生きとるけえ、身体のおちこちにガタがきとるよ」

修平は、言いながら悪い方の右足を伸ばしたまま、畳の上にとどかっと尻をついて座った。

「叔母やんの人參畑がやられてもうて、悔やんどるけど、
獵友会の駆除隊員であのボス猿をなんとか仕留められんも
んかなあ——」

洋介が聞いた。

「あのゲバラは人間並みに頭が切れるけんのお——」

修平はそう前置きしてから、

「もう何年も前、檻かまぼこの中に子猿が入ったんじゃが、
射殺するために、わしらが鉄砲を取りに戻った隙をみて、
ゲバラが子猿を檻から逃がしたことがあった——」

「檻の中から？」

「ああ、役場の職員の岩原が見とったら、ゲバラは檻の前
で二本立ちになると、あの重たい扉を引っ張り上げたそう
な！ 岩原はゲバラのド迫力に恐怖を感じて何もできん
かったそうな」

修平は目を剥いて話した。

「本当ですか？」

「嘘なもんか！ わしが戻ったとき、ゲバラが子猿を背
に乗せて逃げて行くのをわしはこの眼で見たんじゃから。
奴は頭がいいし度胸がある。猿ながら大したもんじゃ——」

修平は感心しながら、そう言つて煙草を銜えると、百円
ライターで火をつけた。

「んんとか仕留められんのですか？」

「無理を言わんでくれ、この膝、医者から人工関節を入れ
ろと言われとるんじゃ。忍び寄るにも奴は眼も耳も鋭いし
警戒心が強いからのお。どうじゃ、お前が銃所持の免許を
取つてハンターになつたら——」

修平が言った。

「俺が？」

「そうじゃ！ 獵友会も年寄りばかりじゃし——。後継
者となる、若いもんがおらん」

「俺だつて五十五だよ！」

「なに！ 俺らから比べりやまだまだ鼻たれ小僧じゃね
えか！ ハンターがいなくなつてみる、この限界集落はた
ちまち、猿の惑星になつてしまふぞ！」

修平は、そう言つて笑いながら紫煙を吐いた。修平の脂
で黄ばんだ前歯は二本欠けている。

「警察署の生活安全課に行つて、猟銃所持の免許を受けてえと言つたら申請の仕方を教えてくれらあ。害獣駆除隊員になることを条件に役場から補助金も出るしのうち」と修平から言われたが、洋介は返事を躊躇つた。だが猟銃所持試験を受けてみようかとも思つた。

洋介は数日後、警察署の生活安全課を訪れると、初心者講習の手續きを行った。修平から猟銃所持試験はかなりの難関であると聞いていたので、試験までの一カ月間、好きな晩酌も止して猛勉強に励んだ。試験は銃に関する法律、構造、鳥獣に関する法律と知識などに分かれ、覚えねばならないことは山ほどあつたが、猛勉強の甲斐あつて、その年の暮れに合格した。それから、警察による身辺調査があつた。技能講習試験を受けたのは年明けであつた。そしてまた身辺調査があつた。交友関係、素行、借金などを調査しているようであつた。暴力団に銃が渡らないか、借金苦で銃を強盗に悪用される恐れはないか。そのための調査であるらしかつた。調査が終わると、銃の所持許可を申請して許可が下りるのをさらに一カ月以上待たねばならなかつた。ようやく銃を手にしたのは二月初めのことであつた。

洋介は、銃の選定に際して、ボルト式ハープライフル銃を購入した。ボス猿ゲバラに忍び寄り、または待ち伏せし、

遠距離から仕留めるにはこのハープライフルしかないと思つたからだ。

ハープライフルは散弾銃に区分されるが、銃身の半分までライフルリングを切つてあるので弾丸は回転して飛ぶ。その最大到達距離は七百メートルから千メートルであると言われる。弾丸が四千メートルまで到達するライフル銃にはかなわないが、その破壊力はライフル弾の三倍ともいわれる。ライフル弾のように鋼鉄を貫通させるような威力はないが、サボット弾は口径が大きいので標的に大穴を開けるのである。しかし、専用のサボット弾は高価で一発五百円以上もするが、銃の所持許可を得て十年に満たないために、ライフル銃を所持できないハンターに人気のある猟銃である。

「そのハープライフルで獲物を狙うときは、必ずバックストップのあることを確かめてから引き金を引かないと、弾はどこまで飛んでいくかわからんぞ」

新銃を手にした洋介に、修平が注意を与えた。

「昔こんなことがあつた」

修平は、そう前置きすると話を始めた。

「朝山の谷川で、十一月の半ば、射殺死体が見つかった。

死体は福岡市から溪流釣りに来ていた七十歳になる不動産屋を営む男で、裏で闇金もやっておつたそうだ。弾は仏の

額のと真ん中から後頭部へと貫通していて、仏は林道わきに車を止めて、釣竿を手に谷川へ降りて行こうとしていたところを狙われたのだろうと、警察は推察していたらしい。警察は仏が不動産屋で闇金も営んでいたことから、怨恨または金銭トラブルによる計画された殺人であろうとして捜査していた。警察は暴力団や射撃の上手な元自衛官とかライフル射撃の国体選手まで事情聴取したそうだが、一向に犯人には繋がらなかった。それから半年経って、警察署で年に一度の銃検査のとき、検査会場のことだったらしい。

（去年の十一月の半ば、朝山で大きな鹿を撃ちのがしてなあ——）

銃検査の順番を待っていた猟師の一人が、知り合いの猟師にこんな話をしているのを耳にした生活安全課の警官が、その猟師を別室に呼んで話を聞いたところ、日付も時間も場所も一致したそうだ。犯人はあんたやったのかという結末や。もちろん本人も驚いていたそうな——。地元の猟師なら、地形に詳しいから、森の向こうの谷川沿いに林道が走っていることを知っていただろうが、その人は隣の猟師だったから、それを知らないで引き金を引いたのじゃろう。弾は偶然に溪流釣りに来ていた被害者の額のと真ん中に当たったのじゃが。そんなこともあるから、弾丸に飛距

離のある銃は、必ず斜面に向かって引き金を引くことだ」
修平が注意を促して話をした。洋介は、それから更に、猟師になるための狩猟試験を農林事務所を受け狩猟免許も得た。そして、一年後ようやく害獣駆除隊員の任命を受けているので、害鳥獣駆除隊員として任命された資格のあるハンターでなければ駆除できないことになっている。

その日、修平の家に猟友会の仲間が集った。仕留めた猪を解体し、焼き肉の炭火を囲っている。酔いの廻った老猟師たちの話は、自慢話ばかりである。俺の仕留めた猪は百何十キロあったとか、俺は二百メートル離れた場所から谷間の鹿を仕留めたとか——。

新米猟師の洋介は、しばらく聞き役に徹していたが、
「俺は、猪や鹿よりも、ボス猿のゲバラを仕留めなけりや、ますます被害は広がるように思うのだけど——」

と猿害の話を切り出すと、誰もが口を噤んで場は白けた。
「ボス猿を撃てば、群れが分裂して、さらに被害を広げる恐れもあるが、あのゲバラだけは例外で厄介な奴じゃ——。頭が切れるし度胸もいい」
修平が言った。

「それに、奴は俺たちハンターを憎んでる」

洋介の隣に腰かけていた、七十半ばで頭髪の薄い作蔵が

そう言つて、紙コップの冷酒を一気にあおつた。

「憎んでるつて、どういふことですか？」

洋介が聞いた。

「お前は知らんやろうが——。あれは二年前の冬じゃつた。奥山の檻罠に母子猿が入つた、という連絡が役場からきた。あのとき、修平さんと北沢の三人で、銃を持って駆除に向かつたら、檻罠の中に、まだ若い母猿が、体を丸めて子猿を隠すように、両手で腹に押し付けて庇つていた。わしは、あの母子猿を見たらかわいそうになつて、射殺することには気がすすまなかつた——」

作蔵は、そこまで話すと、暗い顔をして黙り込んだ。

「あんときはゲバラが神社の椎の木の裏に隠れて、気が狂つたように、わしらを威嚇して吠えとつた。あの子猿はゲバラの子やつたのかもしれない。それに、わしも逃がしてやりやあええのにも思うとつたんやが、新米猟師の北沢は強気なところを、わしや作蔵さんに見せたかつたのやろう。俺が射殺する言うて、母子猿を撃ち殺してしまつたんよ。あれからじゃ、ゲバラが悪さをするようになったのは——」

修平は沈んだ顔つきで話し終えると、短くなつた煙草を土間に捨て、パチパチと弾ける炭火の炎をじつと見つめてゐる。

「北沢さんというと、去年息子さんが交通事故で亡く

なつた？」

「そうじゃ、あれ以来、猟友会の誰も猿を撃ちたがらんよになつた。北沢も警察に鉄砲を返納して猟師をやめよつた」

修平は切なげに言つた。

「しかし、このままゲバラを野放しにしていたら、農作物の被害はますます増えるばかりですよ」

洋介は、なにか怨念めいたものを感じて、気概を失いそうになつたが、誰かがゲバラを仕留めない限り、農作物の被害は無くならないのだと思つてゐる。

「奴を仕留めるには、雪を待つことじゃ。山に雪が積もれば、餌が摂れないからゲバラの群れは必ず里に下りてくる。奴はハンターに気づいても、樹に登れば狙い撃ちされることを知つてゐるから、藪の中を逃げて行くが、雪が積もれば足跡が残るから、奴の足跡を追つて行けばいい。つまり、忍び猟じゃが。奴は賢いから、追つてくるハンターを足場の悪い岩場に誘ひ出すじゃろう。じゃから奴との距離を置いて狙うことが肝心じゃ。焦ると、足を滑らせて転落するからな」

作蔵は、洋介に教示して言つた。

薄霧村に雪が降つたのは一月の半ばのことであつた。雪は夜を徹して降り積もり、明け方には薄霧村を雪景色に変

えていた。

洋介は仏壇の優子の写真にコーヒーを供えると、座布団に膝を折って座している。

写真の中の優子は、ストレートの黒髪を肩まで伸ばし、色白で目鼻立ちが良く美人であった。洋介は親類の者たちから、お前には勿体ねえ嫁さんじゃ、などと揶揄からかわれたが、身体が弱くよく風邪をひいていた。だが運動がてらにと、山仕事に連れ立って来るようになってからは体力もつき元気になっていたのに――。

優子は森林組合の事務員であった。洋介とは同じ年で、どちらからともなく惹かれあつて付き合うようになったのだ。背景のヒマラヤスギの浜辺は、旅行先のバンクーバーで撮った写真である。シャッターを押したのは洋介だった。あの頃、俺は本当に幸せだった。優子と二人でいろんな国へ旅をした。カナダ、ハワイ、オーストラリア、スイス、フランス、イタリヤも一カ月間旅をした。

優子の身体に異変が生じ、肺に腫瘍が認められたのはアメリカ旅行を計画していた時だった。入院後、優子の身体は日に日にやせ衰えていった。抗がん剤治療で髪は抜け落ち、毛系の帽子を被っていた。あの日、あの時、俺は優子のやせ細った手を握りしめていた。

(洋ちゃん、ありがとう。本当に楽しかった……)

優子は、消え入りそうな声でそう言うと、永遠に眼を閉じてしまった。そして、優子の目尻から一筋の涙が流れおちると、ベッドの枕を濡らしていた。優子は、二人で旅した時のことを言ったのだろうか。いまだに優子の発した言葉が気にかかっているが、優子の死に際の言葉に、救われたような気もしないではなかった。

洋介が手を合わせて拝んでいると、玄関から叔母の声があつた。立つて玄関に向かうと、叔母は真つ青な顔で息を切らせている。

「そんなに慌てて、どうしたん？」

「ゲバラが家の中に！」

叔母は悲鳴をあげて助けを求めた。洋介は驚き、ガンロッカーから銃を取り出すと、叔母の家に向かったがゲバラの姿はもうなかった。叔母の話はこうだ。叔母が畑から帰ってくると、閉めたはずの玄関戸が開いていた。そして、仏間からチーンとリンの鳴る音がしたので、今日は父ちゃんの命日でもないのに坊さんが来ていると思つて仏間に向かうと、仏壇に供えていたリンゴの笈ぎを持ち、ゲバラが二足歩行で廊下を歩いて玄関から堂々と出て行ったのである。洋介は、家に戻ると身支度を整えゲバラのあとを追つた。

山裾の畑に、雪を被つた冬大根や白菜が野猿の群れに荒

らされていた。洋介は雪を踏んで雪山に入った。ゲバラは洋介の姿を察したらしく、群れを先導して威嚇の声で吠えながら、山奥へと戻っている。ゲバラとの距離は二百メートルほどだ。

樹林を抜けると、傾斜が増し足元が滑った。洋介は銃を背負うと、岩山を這うようにゲバラを追った。ゲバラの吠える声は、二ノ岳の尾根へと向かっているが、群れは谷の向こうを三ノ岳へと分かれている。洋介は立ち止まると、狩猟距離計を覗き群れの移動を確かめた。

ゲバラの副官らしい野猿が、谷の向こうの岩の上に見えた。警戒の声で吠えながら、群れを三ノ岳へと誘導している。しかしなぜ、ゲバラは群れから離れているのだろう。洋介にはゲバラの行動が理解できない。洋介が立ち止まると、ゲバラも立ち止まり先へ進もうとしない。

（ゲバラは賢いから、追ってくるハンターを足場の悪い岩場に誘うじゃろう。奴と距離を置いて狙うことが肝心じゃ。焦ると足を滑らせて転落するからな）

洋介は、作蔵の話を思い出していた。ゲバラは百メートルほど離れた岩の上に立って洋介を睨んでいる。洋介は銃に弾をこめると、灌木の枝に銃を委託してスコープを覗いた。銃を眼にしたゲバラは、岩陰に隠れると威嚇して吠えている。洋介はゲバラが岩陰から姿を現すのをしばらく

待った。雪は深々と降り続いている。引き金に指をかけるのと、凍り付いたように感覚を失っている。洋介は人差し指を口に銜え感覚を戻した。

しばらくすると、ゲバラが岩の上に四つ足に立つのを、洋介はスコープに捉えた。艶の良い灰色の毛並みが吹雪に逆立っている。洋介はスコープの照準線をゲバラの赤い額に合わせると、息を吸い、ゆっくりと吐きながら引き金を引いた。雪山に銃声が木霊した。手ごたえを感じた。

洋介は銃を肩にかけると、ゲバラのもとに向かった。岩を上ると、そこはもう尾根筋だった。尾根筋は上り下りを繰り返しながら三ノ岳へと続いている。新雪に赤い鮮血が滲んでいるのは、ゲバラの血だ。それは尾根筋の新雪を赤く滲ませ点々と続いている。頭部を狙ったが、弾は外れたらしい。洋介は血痕を辿ってゲバラを追跡した。

横殴りの吹雪はさらに強まり、頭にも肩にも雪が張り付いた。しばらく歩くと、洋介は吹雪のなかに唸り声を聞いた。洋介が立ち止まると、吹雪の切れ間に、ゲバラの姿が浮かんで見えた。ゲバラは岩の上に四つ足に立って、待ち構えていた。吹雪のなかにゲバラの灰色の毛が逆立っている。弾はゲバラの右肩を掠ったらしく、肩から前足へと鮮血が滲んでいる。ゲバラの年齢は人間にたとえるなら七十を過ぎているらしいが、毛並みもよく精悍な顔つきをして

いる。洋介は銃を構えると、スコープを覗き、ゲバラの頭部に照準線を合わせた。

そのとき、三ノ岳から、群れの啼き声が風に運ばれてきた。それは洋介の耳に吹雪の音のような物悲しい叫びに聞こえる。洋介は狩猟距離計を覗いて確かめた。三百四十メートル先の三ノ岳の雪原に群れが集まっている。群れはゲバラを待っているのだ。

ゲバラは岩の上に四つ足に立って微動だにしない。ゆっくりと群れを振り返ると、鋭いまなざしで洋介を睨んでいる。さあ、撃てといわんばかりに。

（そうか、お前は群れを守るために、自ら囿になったのか
↓

洋介はそう思った。吹雪は容赦なくゲバラの身体を叩きつけ吹き荒れている。ゲバラの右肩に張り付いた雪は鮮血に赤く滲んでいる。

「早く行け！」

洋介は小声でつぶやくと銃口を下ろした。しばらく対峙したのち、ゲバラはゆっくりとした動作で洋介に背を向けた。そして吹雪のなかを群れの待つ雪原へと向かっていく。誰が名付けたのか知らないが、その名は、革命家エルネスト・ゲバラに喩えたのだろう。奴にふさわしい名だ。

（俺だって、できることなら、この命に代えて優子を守っ

てやりたかった。だけど、病気が相手じゃどうしようもねえじゃねえか——）

喉元に熱いものがこみ上げてくると、吹雪のなかのゲバラの勇姿は、洋介の眼にぼやけていた。春はまだ遠い、そう思った。

その日以来、ゲバラも群れの猿たちも、薄霧村に姿を見せることはなかった。